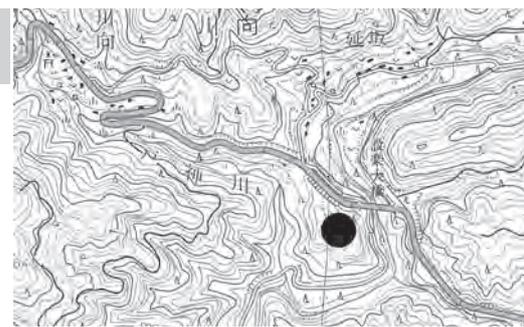


<p>おおはた 大畑遺跡(本発掘調査B)</p>	
<p><b>所在地</b> 北設楽郡設楽町川向地内 (北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)</p>	<p>調査地点(1/2.5万「田口」)</p>
<p><b>調査理由</b> 設楽ダム <b>調査期間</b> 平成29年5月～平成30年1月 <b>調査面積</b> 13,950㎡ <b>担当者</b> 鈴木正貴・鈴木恵介・早野浩二・永井邦仁・松田訓・永井宏幸</p>	<p><b>調査の経過</b> 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。</p>
<p><b>立地と環境</b> 大畑遺跡は、境川と戸神川の合流点北東側に位置している。両河川は遺跡を挟んで標高約370mの谷底を流れているが、遺跡はそこから崖や急斜面で隔てられた山地の頂部に所在し、標高は430～446mである。その頂部には、東西2か所に南北方向に細長い平坦面を有する尾根があり、それらにはさまれて南側へ抜ける谷地形が存在する。この谷地形の奥部は、くぼ地状になっており、そこを中心に黒色土が堆積している。遺跡はこの谷地形を中心として広がっていると想定されている。なお、遺跡南側の境川沿いには川向東貝津遺跡、同西側の戸神川沿いに大栗遺跡があり、両遺跡では平成27～28年度に行われた発掘調査で縄文時代中期の竪穴建物跡などが検出されている。</p>	<p><b>調査の概要</b> 調査区は、設楽ダム常時満水時の水位である標高438m以下で設定された。調査は谷地形の最下部を南北に伸びる作業用道路を挟んだ東西で区切られた東側の17A・B区から着手し、次いで西側の17C・D区へ進んだ。その後、先述のくぼ地に堆積した黒色土の下面で遺構検出を行った。検出された主な遺構は、縄文時代の竪穴建物跡12基の他に竪穴状遺構1基や集石炉1基、陥し穴8基などがある。</p>
<p><b>A 区</b> A区は東側尾根周辺の斜面に設定された。その南端には片麻岩を主体とする岩盤が露頭し、この岩盤と上部の粘土層(基盤層)の境界付近では常時湧水が発生している。検出された主な遺構は竪穴建物跡1基と性格不明土坑1基、陥し穴2基と少ない。しかし尾根上方の斜面地では、凝灰岩の石器剥片や縄文時代前期の土器の他に灰釉陶器碗(黒笹90号窯式期)も出土している。これらの遺物は、調査区外となっている東側頂部の平坦面から流出したものと考えられ、当該地点にも遺跡が広がっていることを示している。</p>	<p><b>竪穴建物跡</b> 竪穴建物跡065SIは尾根筋のわずかな緩斜面(標高約432m)に単独で立地している。平面形は若干いびつな円形もしくは多角形を呈し、長径4.4mを測る。緩斜面を掘り込んでいたため遺構検出面からの深さは北端で0.48mであるのに対して南端では数cmしかない。壁溝はなく柱穴4基と底面中央部やや北寄りに一辺0.5～0.6mの方形石囲炉がある。石囲炉は板状の片麻岩を組み合わせたもので北東隅に摺石、北西隅に副炉がそれぞれ設置されている。副炉は石囲炉の外側に板状の礫3点を組み合わせたものであるが、その内部には顕著な焼土や炭化物はみられず、その脇で石鏃1点が出土している。なお、石囲炉本体においても多量の炭化物はなく、底部の礫が一部赤変しているのが確認されたのみである。竪穴建物跡の埋土は多量の炭化物や炭化材を含んでいるが、出土土器はごくわずかである。時期は縄文時代中期末と考えられる。</p>
<p><b>065SI</b></p>	

**D 区** 遺跡南西部に設定されたD区では、縄文時代の竪穴建物跡2基、時期不明の竪穴状遺構1基が検出された。竪穴建物跡440SIは、谷地形西側の尾根上平坦面（標高約433m）に位置する。平面形はやや歪な六角形であり、長径3.8mを測る。遺構検出面からの深さは最大で約0.3mである。壁溝はなく、支柱穴を特定しにくい。壁に沿って8基のピットが検出されており、これが関係しているものと考えられる。また当該遺構では炉も検出されず、焼土や炭化物の出土も少ない点が特筆される。出土遺物は埋土中から縄文土器の小片が出土しているのみで中～後期と推測される。竪穴建物跡490SIは、440SIの東側斜面を下った標高約432mに立地する。平面形は楕円形に近い隅丸長方形で長径4.0m、短径3.3mを測る。遺構検出面からの深さは最大で約0.4mである。当該遺構も壁溝や炉はなく支柱穴が特定しにくい。埋土中の出土土器はわずかであるのに対し、白色の凝灰岩を中心とする石器剥片が多くみられる点が特徴である。当該遺構については詳細な時期は特定できていない。この他440SIから約20m南方に竪穴状遺構370SXがある。当該遺構の平面形は隅丸長方形で長径5.4m、短径4.2mを測る。壁溝に相当する小溝が一部にみられ、底面の一部で焼土塊が検出されている。しかし顕著な遺物がなく、縄文時代の竪穴建物跡とはしがたい。

**黒色土とくぼ地**

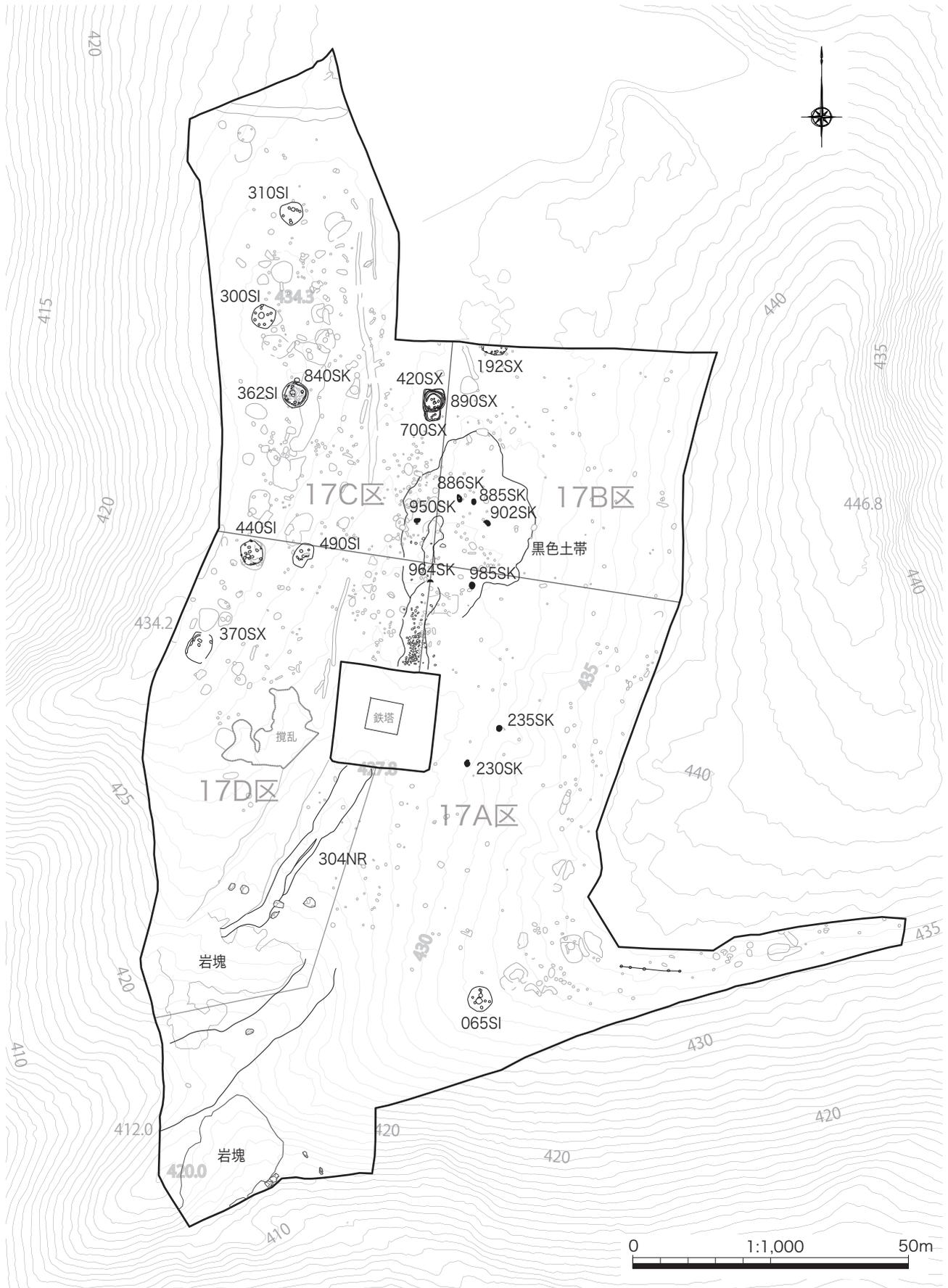
遺跡中央の谷地形とくぼ地に広がる黒色土の範囲は約700㎡である。黒色土の上面では顕著な遺構や遺物が検出されていない。くぼ地では黒色土が最大で約1.1m堆積しているが、同層中からの出土遺物は少なく縄文土器の小片や石器剥片が出土しているのみである。これに対して黒色土下の基盤粘土層上面で行った検出によると、くぼ地から南へは幅約5.0mの自然流路が約75m延びており、若干砂の混じった黒色土の堆積とともに尾根上からの転石が多数みられる。湧水を利用する施設の存在も想定されたが、顕著な遺構や遺物はみられなかった。一方、くぼ地の特に縁辺では陥し穴6基が検出され、磨石や石皿など堅果類の加工を思わせる遺物が出土しており、湿地の周辺が活動範囲になっていたことが考えられる。  
(永井邦仁)

**C 区** C区は遺跡北西部の主に丘陵頂部周辺に設定された。遺構は縄文時代の竪穴建物跡8基、近世以降の道路状遺構が検出された。竪穴建物跡は、300SI、362SIが石囲炉を伴い、420SI、890SI、1030SI、700SI、1000SIはほぼ同位置で重複して検出されている。

**竪穴建物跡  
300SI**

300SIは平面形が長辺4.1m、短辺4.0mの隅丸方形もしくは多角形の形状を為し、内部の石囲炉390SLは円形もしくは多角形となっている。遺構検出面からの深さは、西端で0.1m、東端で0.2mと底面が緩やかに東へ傾斜している。埋土には焼土、炭化物、炭化材、黒曜石、熔結凝灰岩の破片や剥片が多数検出された。柱穴は831SP、832SP、833SP、834SPの4基が検出され、深さはいずれも0.4m以上を測る。石囲炉390SLは、28点の礫によって上端が囲まれ、竪穴建物跡床面からの深さは最も深い部分で28cmを測り、内部は側面から底面にかけて非常に強く被熱している。礫の設置に伴う掘方は礫の後背部に確認できず、炉の上端側面に貼り付けるような方法で構築されたようである。竪穴内では周溝は検出されていない。また、西側の丘陵頂部付近の竪穴建物跡の内、遺構検出面の標高が最も高いのが300SIで、433.7m付近に位置している。

300SI検出時に称名寺式期の縄文土器破片が検出されていることから、300SIに重複する他の遺構の存在も想定されたが、炉と同一の底面南東隅部では山の神1式期の深鉢が口縁部を北側に向けて倒れた状態で検出されている。炭化材の多さから300SIは火災住居である可能性も指摘されているが、出土した深鉢は二次被熱は見られないことから、300SI廃絶後に設置された可能性も伴う。石囲炉や柱穴を伴う竪穴建物跡300SIはこれに基づい



大畑遺跡遺構全体図 (S=1:1000)



た時期の遺構と推定される。

**3 1 0 S I** 310SIはC区丘陵頂部付近の竪穴群では最北に位置する。平面形は角の丸い五角形状で、長辺4.1m、短辺4.0mを測る。竪穴建物跡の底面は北西方向に向かって傾斜し、遺構検出面からの深さは0.2m～0.3mを測る。

竪穴内南東隅部では深鉢が口縁を西に向けて倒れた状態で検出された。土器の外形としては形状を保っておらず、扁平な状態となっていた。この土器については、親田式もしくは中富式と指摘されている。

炉は検出されなかった。柱穴は明確なものが875SKと877SKの2基確認され、それとは別に竪穴内南端付近に土坑878SKが検出された。878SKは竪穴底面からの深さ0.3mを測り、埋土からは土器破片も検出されている。竪穴に付属する遺構と考えられるが性格は不明。また、竪穴内の中央より北西側に偏在する大小多くの礫が検出され、これらについては屋根材の一部との指摘もある。

**3 6 2 S I** 362SIは遺跡西側の丘陵頂部中央付近に位置する竪穴建物跡である。数次に渡り改築がこなわれているが、最初期の形状は平面形が長辺4.68m、短辺4.57mを測る隅丸方形。遺構検出面からの深さは0.4m。検出段階で362SI上には石列450SX、北側に接する石敷炉840SLが確認され、炉内部の下位は礫を組み合わせ、被熱した状態が確認できる。平面の切り合いから840SLは362SI埋没後の構築であることが確認されている。362SIとの切り合い関係から縄文時代中期後半以降の時期を想定している。また、450SXは362SIが完全に埋没した後に北半部分縁辺部に沿うように組み合わせて据えられており、362SIの廃絶に伴う儀礼行為と考えられる。同様に840SLについても362SIに近接した位置に構築されたことと合わせて、362SI廃絶に関連する遺構と推定している。

**竪穴建物廃絶に伴う儀礼行為**

362SIは建て替えが行われ、合わせて炉が2基、柱穴8基が検出された。炉800SLが最初期の炉であり、これに伴う柱穴は862SP、863SP、864SP、865SPである。800SLの南東側の炉石を外し、新たに設けられたのが871SLである。これに伴う柱穴は800SLに伴う柱穴よりも径が小さな866SP、1042SP、1043SP、1044SPである。それぞれの石囲炉に伴う柱穴が存在することから、800SL段階の建物は、一旦廃絶し、871SLと共に新たな柱穴を用いた建物が再度構築されたことが想定される。362SI掘削中に断面において確認された焼土層600SLも一旦は炉と推定したが、結果的には871SLの焼土を西側に掻き出したものと見られた。この焼土層が800SLの上位に堆積していることから800SLが先行した炉跡であることが確認できる。

周溝1017SD、1018SD、1019SD、1020SD、1025SDはほぼ底面全周に巡り、南西と北西で一部途切れる。362SIの断面で確認された埋没状況から、これらの周溝は800SL使用時の初期段階のもと考えられ、前述の600SLの焼土堆積状況と考え合わせて871SL段階では底面が数cm高い位置で使用され、周溝は掘削されていなかったと考えられる。

**4 2 0 S I** 420・700・890・1000・1030SIの重複した竪穴建物跡。周溝を伴う700SI、掘り込みの浅い1000SIの形状は、これらの遺構の北東側に位置する192SIも同様に浅い掘り込みで構築されており、関連も想定される。

重複関係は420SIが最新、890SI・1030SIがそれに続き、700SI・1000SIが古い段階の遺構と想定される。

420SIは一辺約3.3m、方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構検出面からの深さは0.3m。この遺構に伴う底面の遺構は見られない。断面観察から890SIや1030SIの埋没後に

再掘削し、構築された可能性が高い。

**890SI** 890SIは推定直径3.3mの円形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構検出面からの深さは0.35m。掘方の北側は420SIによる掘削にて欠損し、南側の掘方を残存する。底面には円形に巡る周溝を配する。小規模な土坑も周溝内に位置することから、底面で検出されている遺構は890SIに帰属する可能性がある。時期は420SIに先行する。

**1030SI** 1030SIは一辺約3.6mの推定隅丸方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構内の多くは420SIや890SIによって欠損、北側と東西の掘方が残存し、南側の掘方は890SIによって欠損する。

**1000SI** 1000SIは一辺約3.6mの方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。420SI他の重複する竪穴状遺構の中では最も北に位置する。遺構面からの深さは深い部分でも0.1m程度である。南端部は直接的には890SIによって欠損している。北辺で検出されている底面が他より浅く、他の遺構に先行して構築されていたと考えられる。

**700SI** 700SIは残存長3.0mを測る、南北方向に楕円形もしくは隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。深さは浅く、遺構面より0.1m程度である。1000SIとの直接的な切り合いは確認できず、420SI、890SI、1030SIによって北半部を欠損し、これらに先行する時期の遺構と考えられる。

**B 区** B区は東側の尾根に向かって登る斜面部を中心とする調査区で、明確な遺構は192SIがある。調査区内の高低差は大きく、最高で437m、最低で428mとなっている。

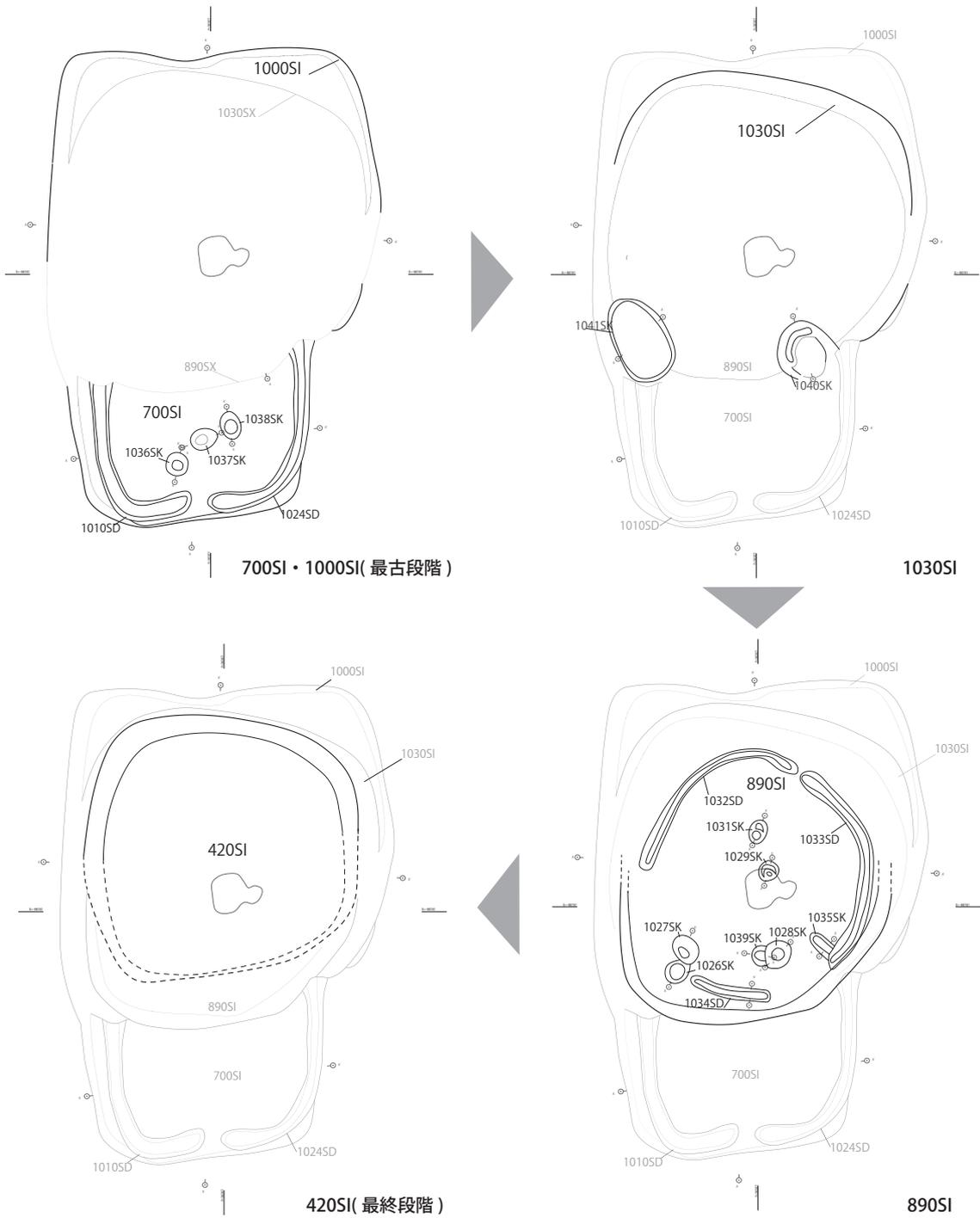
**192SI** 192SIはB区北端で検出された竪穴建物跡である。調査区北へ残存部分が連続し、現状では南辺部分が検出された状態。遺構検出面からは非常に浅く、周溝の底部や小規模な土坑が検出された。断面では遺構の深さも0.1m程度が確認できるのみである。遺物は黒曜石や白色風化石材等の剥片が確認できた。検出中に出土した土器破片は北屋敷期相当との指摘を受けた。

**ま と め** 大畑遺跡の遺構分布状況は、西側のC・D区の丘陵頂部付近と中央の黒色土が分布するE区の谷部周辺に遺構が集中し、南部のA区内、丘陵先端部に離れて竪穴建物跡が検出された。調査区周辺にはAB区の東側に未調査の丘陵頂部が存在し、これと遺構の検出されたC・D区の西側丘陵部が対になって、E区の中央谷部を形成する地形であり、A区065SIの丘陵尾根上位部分では石器剥片等の遺物が周囲に比べて多く検出されたことも合わせて、東側丘陵部に遺構が存在する可能性は高く、これも含めて一連の遺跡と考えられる。

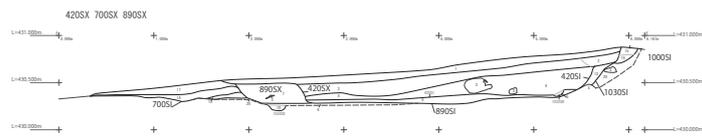
竪穴建物跡は合計12棟が検出されたが、検出された土器は縄文時代中期後半～後期と見られ、特に中期後半には複数の竪穴建物が並存する時期があったことが想定される。さらに、065SIの副炉や300SIの円形石囲炉など特徴的な構造の炉を持つ竪穴建物跡等、竪穴建物ごとに炉の有無や炉の形状などに差があることが判明した。また、420SIをはじめとする竪穴建物跡は5棟が重複した状況で検出されており、他の竪穴建物跡が時期が異なっても分散した位置を示すのに対して、同じ位置において幾度も建て替えられたことから、利用目的と位置の強い関連が想定される。

以上のように、調査区内の様々な地形に応じた遺構・遺物が検出されたことから、縄文時代中期から後期にかけての当該地域における丘陵部土地利用状況について有用な事例が調査できたものと思われる。

(鈴木恵介)

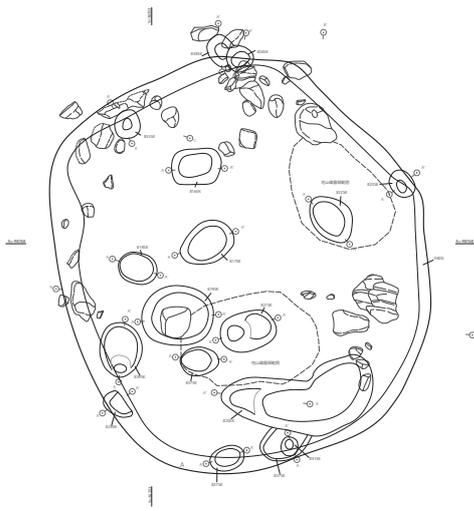


竪穴建物跡 420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI 変遷図 (古い方から順に時計回りに配置 :S=1/80)

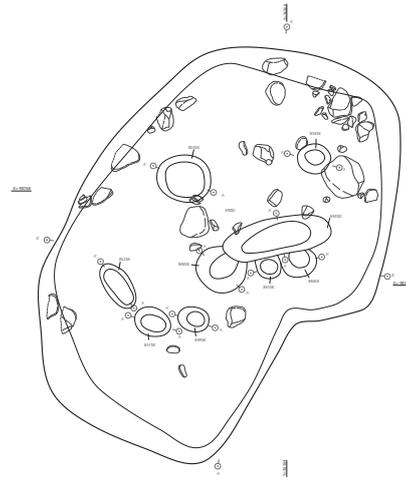


竪穴建物跡 420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI 南北方向断面図 (S=1/80)

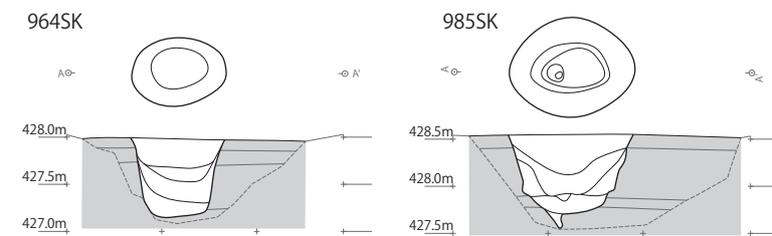
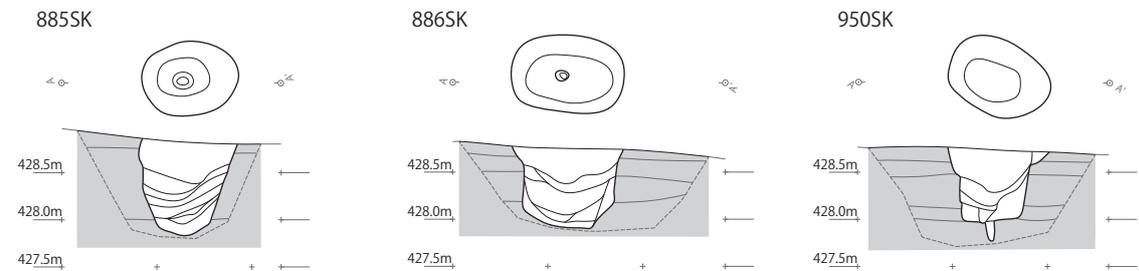
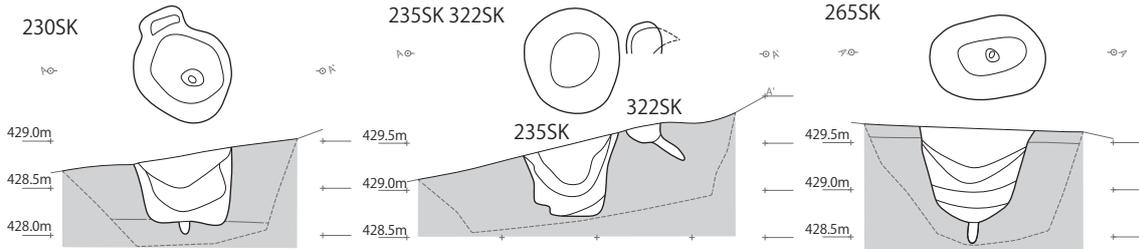




竪穴建物跡 440SI(S-1/80)



竪穴建物跡 490SI(S=1/80)



大畑遺跡陥し穴 (S=1/80)



大畑遺跡遠景（北から）



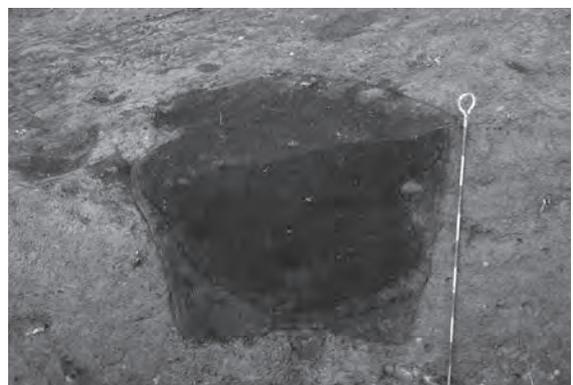
065SI 完掘（北から）



065SI の炉跡（東から）



440SI 完掘（北から）



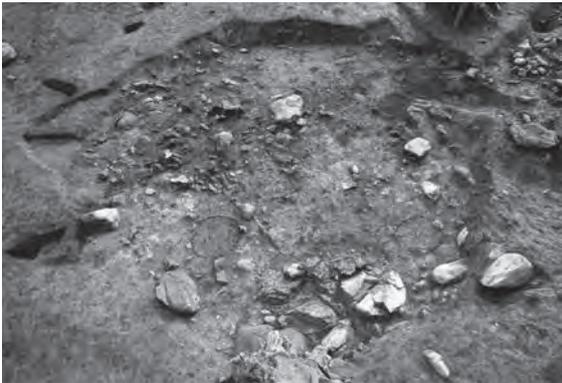
230SK 断面（南から）



300SI の炉と柱穴 (東から)



300SI の石囲炉 390SL (東から)



310SI 柱穴検出状況 (北西から)



362SI に隣接する 840SL (北西から)



362SI 上面の石列 450SX (西から)



362SI の炉と柱穴 (東から)



362SI 内の石囲炉 871SL (右)・800SL (左 南から)



420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI の重複 (東から)